

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	国際共同研究『韓国済州島社会における日本語の位置 ― 現在,そして未来 ―』 (済州プロジェクト) について
Author(s)	佐藤, 暢治
Citation	ニダバ , 28 : 169 - 177
Issue Date	1999-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048058
Right	
Relation	



国際共同研究『韓国済州島社会における 日本語の位置－現在，そして未来－』 (済州プロジェクト) について

佐 藤 暢 治

0. はじめに

小稿は、国際共同研究『韓国済州島社会における日本語の位置－現在，そして未来－』（以下、済州プロジェクトと呼ぶ）について、その概要を紹介しようとするものである。済州プロジェクトの目的は、現代の済州島社会のなかで日本語がどのような位置にあるのかを言語学，社会学あるいは心理学の観点から学際的に明らかにしようとするところにある。

済州島社会に関する研究は、地理学や文化人類学など様々な分野で行われ、数多くの成果があげられている。しかし、現在の済州島社会で日本語がどのように使われているのかを明らかにした研究はまだないようである。

プロジェクト参加者は、次のとおりである(括弧内は所属と専門分野である)。

金 恩希 (耽羅大学校：言語学)

高永 茂 (広島女子短期大学：社会言語学)

元田 静 (広島大学大学院／日本学術振興会特別研究員：日本語教育学)

佐藤暢治 (広島大学：言語学)

1. 研究の背景

近年、国際社会のなかで日本語がどのように使われているのかを探る研究が、国の内外を問わず少なからぬ研究者の関心を集めている。昨年(1998年)の12月16日と17日にも、国際連合大学において第6回国立国語研究所国際シンポジウム・新プロ「日本語」国際シンポジウム「国際社会と日本語」が催された。シンポジウムでは、27ヶ国で行われたアンケート調査「日本語観国際センサス」の中間報告がさまざまな視点からなされたが、出席した者の感想を一言でいうならば、非常に意義あるものであったということになるであろう¹⁾。

済州プロジェクトについては、そうした時の流れに従ったというよりは、むしろ私自身

の個人的な経験が少なからず関係している。私は、これまでに2度(一昨年8月と昨年の2月)済州島を訪れている。済州島のことは、韓国語済州方言に観察されるモンゴル語からの借用語を調査研究するためであった²⁾が、そのときの済州島での出来事がこのプロジェクトを始めるひとつのきっかけとなった。

済州島での楽しみのひとつは、テレビもさることながら、済州や新済州といった市街地や路地裏を歩き回り、島の人々の生活を垣間見ることであった。時間をみつけては、ぶらぶらとした。その際、私を最も驚かせたのは、日本人観光客に向けてであろうが、看板やショーウインドウに韓国語と並んで日本語が堂々と書かれていたことである。同時に少なからぬ興味も覚えた。特に、昨年2月済州島にいったときには、本来の研究テーマよりも済州や新済州で目にする数多くの日本語の看板やショーウインドウの方に関心を持ったほどである。そのため、済州島に行く度に手を煩わした金恩希氏と、昨年2月は興味半分、研究心半分といったところで時間が許す限り新済州や済州を歩き回り、日本語の看板やショーウインドウの写真を撮った。写真を撮ることになったきっかけは、日本語の表記に誤りが少なくなく、どのような誤りがあるのかを調べてみようという思いからであった。そして、誤りにはいくつかのタイプがあることに気づいた。「シ」と「ツ」の混同、「ン」と「ソ」の混同、促音「ッ」が脱落する傾向、長音「ー」が語末で脱落する傾向などのようにである。

済州島を紹介した旅行ガイドには、どこどこのホテルや土産物屋で日本語が通じると記されている。実際のところ、新済州などでは旅行ガイドで紹介されている以上に日本語が通じるように思える。日本人観光客御用達といわれているホテルさえもある。しかし、看板やショーウインドウに日本語が書かれていることを記した旅行ガイドは今もって見たことがない。そればかりか、済州島では、日本語系外来語が数多く日々の生活のなかで使われている。

済州島は、韓国の他のどの地域よりも生活のなかに日本語ひいては日本文化が浸透しているのかもしれない。そう思わずにはいられなかった。そこで疑問に思ったのが、次のようなことである。済州島の人々は町中に溢れている日本語をどのように思っているのだろうか。どのような日本語系外来語が済州島の人々のなかに定着しているのだろうか。日本文化との関係はどうなのだろうか。知りたいこと、調べてみたいことが山ほどできた。私にとって、済州島で使われている日本語は、言語研究という観点からみても、今までとは違った感覚の興味をかきたてた。そのため、いつの日か済州島の日本語について、それが使われている現状や要因、人々が日本語、日本人、日本国にもつイメージ、日本語系外来語などの問題を多角的に論じ、現在の済州島社会のなかで日本語がどのような位置にあるのかを探ってみたいという思いがあった。

そうしている間にも、日本と韓国の関係は大きく変わろうとしている。金大中氏の大統領就任後、韓国では日本大衆文化解放に関する議論が急に活発になった。日本大衆文化の

早期解放は昨年 10 月の金大中韓国大統領訪日の際にも改めて明言され、その第一歩として年末には日韓合作映画『愛の黙示録』（金洙容監督）やベネチア国際映画祭受賞作品『HANA-BI』（北野武監督）が一般公開された。韓国では、人々の日本大衆文化解放への関心度は高く、この話が話題にのぼらない日はないという。日本でも昨年 10 月下旬からは、連日とはいえないまでも、韓国における日本大衆文化解放の話題がマスコミに取上げられる日が増えている。歌謡界では「サークル」や「S. E. S」といった時代にあったグループが登場してきた。以前から韓国では日本製のアニメが日本製ということを公にすることなくテレビで放映されていたが、日本製であることを公にしたうえで「スラムダンク」や「クレヨンしんちゃん」が放映され始めた。

ただ、関心の度合いとなるとどうであろうか。韓国の方が高いようである。あたりまえといえば、あたりまえではある。思えば、日本大衆文化の解放は韓国の国内問題である。とはいえ、日本と韓国の関係が新たな段階に入ろうとしている現在、日本と韓国の研究者が研究者としてともにできることがあるのであろうか。あるとすれば、それは何であろうか。

こうしたいきさつから始まったのが、済州プロジェクトである。当初、金恩希氏と私でプロジェクトについて話し合いをもった。しかし、このプロジェクトを 2 人だけで行うにはテーマが大きすぎる。何よりも、済州プロジェクトには多くの人の知恵を必要とする。そこで、社会言語学を専門にする高永茂氏と日本語教育学を専門にする元田静氏にも加わっていただいた。

2. 日本語使用の歴史的概要

日本語の海外進出は、戦前は日本の軍事力を背景にしたものであり、近年は日本の経済力を背景にしたものである（川村 1994）。1910 年の「日韓併合」から終戦まで日本の植民地であった韓国もそのなかのひとつである。この時期、韓国では日本の植民地政策の下で韓国語の使用が禁止され、日本語の使用が強制された。その結果として、日常生活で使われる日本語系外来語の数も増えることとなった。

現在、済州島の町中で耳にしたり目にする日本語は、紛れもなく、日本から訪れる年間約 13 万人にも及ぶ日本人観光客を対象としたものである。そして、観光産業を通して、数多くの日本語系外来語がいつのまにか済州島の人々の生活のなかで使われるようになっている。しかし、一方では植民地時代(1910-1945)から使われ続けている日本語系外来語も少なくない。それぞれの語をいくつか次頁に示しておこう。

また、済州島からは戦前・戦後を問わず、彼らが「陸地」と呼ぶ朝鮮半島よりも日本の方が心理的には近いこともあり、日本に多くの人が渡航してきた。そうした人たちが済州

植民地時代から使 れている日本語系 外来語	쿠세	くせ
	끼리	花札・トランプ等の札をきること
	다비	足袋
	호야	火屋
近年使われるよう になった日本語系 外来語	로바따야끼	炉端焼き
	야끼꼬리	焼き鳥
	가라오케	カラオケ
	에사	魚釣りのえさ

島に持ち帰った日本語系外来語もある。済州島から日本への渡航は 1920 年代、戦時中、戦後 1, 2 年の間、4. 3 事件や朝鮮戦争の混乱期と大きな波が合わせて 4 回あった(野村 1996)。これとて戦前の日本の軍事力と無関係とはいえない。

3. 従来の研究

済州島の日本語については、石宙明(1947)、金完鎮(1957)、양순필(1975, 1976)、愼勝行(1984)などが論じている。いずれも韓国語済州方言のなかにどのような日本語系外来語があるのかを論じている。

たとえば、石宙明(1947)では日本語系外来語として 50 語が掲げられている。その当時、どのような日本語系外来語が済州島で使われていたのか、その一端を知ることができるが、50 語すべての起源を日本語に求めることはできないようである。ただし、50 語のなかには石宙明自身が京阪方言と明示しているように 간대기(<カンテキ)「七輪」、そして 본상(<ぼんさん)「丁稚」もその可能性があるように思えるのであるが、関西方言と結びつくものがある。済州島と関西との密な結びつきを示すものなのであろうか。

愼勝行(1984)では、970 語にも及び日本語系外来語が裁縫、食品、土建、木工、印刷、時計、理・美容、電気工事、写真、ビリヤード、釣り、運輸・機械、自動車整備、洋靴、一般用語といった意味分野に従い整理されている。このときから既に 15 年ほどの年月がたっており、現在は数も意味分野もさらに増えていることであろう。実際、愼勝行(1984)には済州島の市街地で幾度となく目にした「ろばたやき」「やきとり」「カラオケ」といった現代の日本文化を代表する語は掲げられていない。

なお、韓国語のなかの日本語系外来語に関する研究として、たとえば横山(1982a, 1982b)があることを付け加えておく。

4. 研究の視点

私たちが済州プロジェクトで明らかにしたいことは、済州島で使われている日本語系外来語を単に列挙するということとは異なる。日本語系外来語を取上げるにしても、どのようなものが生活のなかに定着し、それが人々の生活のなかでどのように使われているかを明らかにしたいのである。済州プロジェクトの目的をここで繰り返すと、現代の済州島社会のなかで日本語がどのような位置にあるのかを、言語学、社会学あるいは心理学の観点から多角的に明らかにすることである。

その際に、キーワードのひとつになりうるのは済州島の観光産業である。バーリン・L. スミス(1991)は、観光をホスト(観光地の人々)とゲスト(観光客)との関わり合いから5つのタイプにわけている。歴史観光、文化観光、少数民族観光、環境観光、レクリエーション観光である。日本人観光客と済州島の人々との関係はレクリエーション観光がその多くを占め、このような場合、バーリン・L. スミス(1991)に従えば両者の間の接触は少ないことになる。そうなのであろうか。接触が少ないとは思えないのであるが。

済州プロジェクトでは、今の時点では流動的な面もあるが、フィールド調査を含めて、次のようなことを明らかにしようと考えている。

(1) 日本語の価値感とイメージ

済州島で現在日本語を習うことや、使うことにどのような価値があるのか。その背景のひとつに観光産業という実用性があることは誰も否定しないが、それ以外にも何か要因があるのか。また、済州島の人々は日本語にどのようなイメージをもっているのか。

意味微分法を用いたアンケート調査を世代間(60歳以上と60歳以下：この区分は植民地時代に日本語教育を受けたかどうかによる)ごとに行い、韓国語(標準語)、韓国語済州方言、英語、中国語などの価値観やイメージとの比較を通じて各々の国や人々へのイメージとともに、日本語の価値観とイメージを明らかにする。

(2) 日本語使用の地域的状況

済州島で日本語がどのように使われているのか、ケーススタディとして新済州を取上げる。

新済州に溢れる日本語の看板やショーウィンドウにどのような語がどのように書かれているのか。また、それへの済州島の人々の意識がどうであるのかをインタビューを通して明らかにする。

(3) 日本語系外来語の使用状況及び定着性

全地域に使われている日本語外来語として、どのようなものがあるのか。それ

らは、世代間(60歳以上と60歳以下)で違いがあるのか。あるとすれば、どのような違いがあるのか。植民地時代を代表する日本語系外来語と現代の日本文化を代表する日本語系外来語それぞれをリストアップし、アンケート調査を通じて明らかにする³⁾。

(4) 日本化と文化変容

済州島の人々は、観光産業あるいは日本大衆文化の解放を通じて日本化の波を受けている。今日の情報化社会においては、個人が時代の影響を受ける場合、価値観が最も外の世界の影響を受けやすいとされている(児玉 1998)。

現代の日本文化を代表する語を手がかりに、済州島の人々が日本文化にどのような対処し、そのことが人々の価値観にどのような影響を与えているのかを民族誌的に記述する。

5. 研究意識

ある人類学者が、研究に際して「面白い研究」「人類学に新しい視点を提供できる研究」、そして「社会にほんのわずかでも貢献できる研究」を意識していると述べている(竹沢 1995)。これらのことばは、2つめの表現は少し変える必要があるが、どの分野の研究者であれ研究者1人1人が意識しなければならないことではないだろうか。

済州プロジェクトを通して、私たちは多くのことを発見し、多くのことを学ぶであろう。そして、研究成果を多くの人に知ってもらう機会をもつであろう。その際に、私たちは研究成果に基づいて何か意見をいうかもしれない。済州プロジェクトのなかに「未来」ということばが入っているのは、そういった意味合いがこめられているからである。

その一方で、忘れてはならない前提もある。それは現地主導主義である。つまり、私たちは研究成果をもとに意見は言うであろうし、協力を求められたら協力もするであろう。問題解決のために協力を求められれば、少しでも役に立ちたいと心から思っている。しかし、問題にどう対処するのかを決めるのは済州島の人々である。「こうすべきだ」と押しつけることは、日本が植民地時代に行ったことと何ら変わらないであろう。

ここで、日本語の看板やショーウインドウのことを再び取上げてみよう。私たちが新済州で日本語で書かれた看板やショーウインドウを写真にとることになったきっかけは、それらの表記上の誤りからであった。誤りの原因としては、いろいろなことが考えられるであろう。看板屋が間違えたとか、お店の人が日本語を十分に理解できていないのようである。実際、写真をとっていたとき、一度お店の人に「看板のデザインを盗んでいる」と誤解されたことがある。写真をとった理由と日本語の表記に間違いがあることを指摘したが、日本語の文字自体を知らなかった。

そのほかにも表記に関わる間違いとして目についたことがある。それは、日本人観光客向けに韓国語と日本語を併記したメニューが用意されているながら、韓国語と日本語とが一致していないというものである。たとえば、**술빔** に「冷麺」のようにである。済州島の大衆食堂では日本のようにサンプルが展示されているということはまずない。そのため、この種の誤りは単なる表記上の間違いとは異なり、店と客（つまりは済州島民と日本人観光客）との直接的な接触であるので両者の間にトラブルがおきかねない。

こうした場合でも、やはり私たちにはこうすべきだという強制する権利はどこにもない。ただ、私たちはメニューにおける韓国語と日本語の不一致に関しては、指摘したような理由から直せるものなら直した方がいいのではないだろうか、というぐらゐの意見はいうかもしれない（済州島に来る日本人が韓国語を勉強してくればいいのかという意見は今横におくとしてである）。しかし、こうした問題にどのように対処するのかを決めるのは済州島の人々である。

6. 今後の展開

済州プロジェクトは、平成 12 年(2000 年) 3 月末の終了を目指している。研究の過程で、調査研究したことは論文などで報告していく予定でいる。そして、研究が無事終わったときには、研究成果を報告書としてまとめ日本と韓国で公刊したいと考えている。

平成 11 年(1999 年) 1 月現在、資料集めや調査のための準備が順調に進んでいる。研究には何かと時間と費用がかかる。野村(1996)には「済州島・ニッポンに一番近い島」という章が設けられているが、それでもである。今年 8 月には大規模な現地調査を行う予定でいるが、可能であれば、この 2 月か 3 月にも調査を行いたいものである。

調査を始める前に、どのような結果がでてくるのか、いろいろと思っていることはある。第 6 回国立国語研究所国際シンポジウム・新プロ「日本語」国際シンポジウム「国際社会と日本語」の席上、姜錫祐(1998)は、次のように述べている。

ところで、いま日本語は、戦後 53 年を経た今も、韓国人の胸には侵略者の言語として強く残されている一方、先進国あるいは経済大国の言語といった、まったく相反するイメージが共存しているように思われる。

その一方で、氏は、韓国における日本の大衆文化の解放により、韓国における日本語のイメージが変化しているかもしれない、と指摘することも忘れなかった。

済州島の場合、どのような結果がでてくるのであろうか。思いもよらないことがでてくるのかどうか、今から楽しみである。

註

- 1) 第6回国立国語研究所国際シンポジウム・新プロ「日本語」国際シンポジウム「国際社会と日本語」で配布された、『「日本語観センサス」中間データ集』に収められている調査票は、済州プロジェクトにおいても大いに参考となるものである。
- 2) 研究成果については、佐藤(1998)『韓国語済州方言におけるモンゴル語からの借用語に関する研究』平成9年度(財)広島大学後援会研究等助成金(サタケ研究助成金)報告書、広島大学 をみられたい。
- 3) 外来語の定着性を探る1つの方法として、辞典に登録されているかどうかという判断基準がある。しかし、韓国語済州方言を記した最大の辞典、済州道(1995)『済州語辞典』済州大學校博物館編にも、日本語系外来語は、編集方針からであろう、収められていない。そのため、この方法を私たちの研究で用いることはできない。もっとも、外来語の定着性を探る方法として、辞典に登録されているかどうかが最善の方法かと問われれば、再考の余地があるように思える。

参考文献

- バーリン. L. スミス(1991)【三村浩史 監訳】『観光・リゾート開発の人類学—ホスト & ゲスト論でみる地域文化の対応』勁草書房
- 川村 湊(1994)『海を渡った日本語 植民地の「国語」時間』青土社
- 児玉徳美(1998)『言語理論と言語論 ことばに埋め込まれているもの』くろしお出版
- 国立国語研究所(1998)『第6回国立国語研究所国際シンポジウム・新プロ「日本語」国際シンポジウム「国際社会と日本語」予稿集』
- 野村 進(1996)『コリアン世界の旅』講談社
- 佐藤暢治(1998)『韓国語済州方言におけるモンゴル語からの借用語に関する研究』平成9年度(財)広島大学後援会研究等助成金(サタケ研究助成金)報告書、広島大学
- 竹沢泰子(1995)「私にとっての人類学と現在社会」綾部恒夫・田中真砂子編『文化人類学と人間』三正館, 32-36
- 金完鎮(1957)「제주방언의 日本語 語詞에 대하여」『국어국문학』18
- 石宙明(1947)『済州島 方言集』서울신문사, 서울
- 済州道(1995)『済州語辞典』済州大學校博物館編
- 愼勝行(1984)『済州語에서의 日本語系 外來語 研究』碩士學位 論文, 慶熙大學校 教育大學院
- 양순필(1975)「済州地域 日本語系 外來語 借用에 관한 調査 (1)」논문집, 제주대학교

관광개발연구소

양순필 (1976) 「濟州地域 日本語系 外來語 借用에 관한 調査 (2)」 논문집, 제주대학교
관광개발연구소

横山景子(1982a) 「韓國의 外來日本語에 대한 考察」 『人文研究』 2, 嶺南大 人文研究所,
37-54

横山景子(1982b) 「韓國語에 移入된 日本語」 『국어학논총』 종규예 교수 환갑 기념논총,
93-116